

日本原子力学会・学生連絡会・シニアネットワーク共済

学生とシニアの対話 in 関西 2011 報告書

SNW 対話幹事：松永一郎、

報告書まとめ：上田隆



開催日時；2011（平成 23）年 12 月 10 日（土）10：30～17：00（懇親会 17：30～19：00）

開催場所；大阪大学吹田キャンパステクノアライアンス棟

参加者；シニア 16 名（+オブザーバー 1 名）、学生；16 名

報告書目次；

1. 概要
2. 対話会スケジュール
3. 参加者一覧（学生とシニア）
4. 開会のあいさつ
5. グループ対話の概要
6. 学生の発表
7. 講評と閉会のあいさつ
8. シニアの感想
9. 学生の事後アンケートの結果概要
10. まとめ

添付資料

①写真

1. 概要

「学生とシニアの対話」活動の一環として、関西にて対話会を実施した。関西での対話は今回で5回目、吹田では2回目、又関西での往復書簡との連動した対話は初めてであった。東京からは日帰りというハードなスケジュールにもかかわらず多くのシニアの参加を得て成功裏に実施された。

2. プログラム概要

- 11:00 開会挨拶、SNW メンバー紹介
- 11:30 対話会・前半 (90分)
- 13:30 対話会・後半 (90分)
- 15:00 議論内容のまとめ、スライド作成
- 15:45 発表
- 16:45 講評&閉会挨拶、学生感想(決意表明)
- 17:30 懇親会

3. 参加者一覧

①学生；16名

大阪大学 8、近畿大学 6、東海大学 1、東京大学 1

②シニア；16名

伊東睦、上田隆、小川博巳、金氏顯、岸本洋一郎、西郷正雄、宅間正夫、中村威、橋場隆、前田肇、益田恭尚、松永一郎、松永健一、路次安憲、若杉和彦、浅井竜哉（オブザーバー、福井大準教授）

③対話グループ構成

Gr	テーマ	学生	SNW
1	原子力安全 A	カンパナート・シルワ（東京大学 M2） 小迫嵩幸（近畿大学 B2） 鄭嘯宇（大阪大学 D2）	西郷正雄、 宅間正夫、 中村威
2	原子力安全 B	鳥山拓也（大阪大学 M1） 船越航平（近畿大学 B3） 井内駿輔（近畿大学 B2）	松永一郎、 路次安憲 上田隆、
3	エネルギー政策 A	山本弘嗣（大阪大学 M1） 服部勇紀（大阪大学 M1） ティティラット・ティプサムリクトン（京大 B4）	伊藤睦、 金氏顯、 前田肇
4	エネルギー政策 B	西山佳朗（大阪大学 M1） 山田佳祐（大阪大学 M1） 富山貴雄（近畿大学 B2）	小川博巳、 益田恭尚、 松永健一

5	燃料サイクル	関根将史（東海大学 M1） 藤岡美咲（近畿大学 B2） 成川隆文（大阪大学 M1） 宮田和志（近畿大学 B2）	岸本洋一郎、 橋場隆、 若杉和彦
---	--------	--	------------------------

4. 宅間正夫会長より開会あいさつ

原子力に長年携わったものとして今回の事故で
ご心配・ご不安を与えました多くの方々に、また
避難を余儀なくされた立地地域の多くの方々に
対して深くお詫び申し上げます。また事故処理や環
境復旧その他の業務に懸命の努力を続けられてい
る方々に心より感謝いたします。



宅間会長挨拶

海外から「技術は受け入れるがその使い方や思想はわが国独自の道を行く」という性質があるようで、原子力についても原爆を開発した米国ではその平和利用に当たって早くから安全について「深層防護思想や安全目標」など高度の思想を築き上げてきた、しかしわが国では「和魂洋才」を踏襲し、技術習得を急ぐ余りそうした安全思想を十分に消化しなかったのではないかと。たとえば「深層防護思想」の基本にある。「原因の如何を問わず不測の事態に備えての“前段否定の論理”」が徹底されず、自然力はここまでだろうから、あるいは技術システム内部で起こりうる事故進展シナリオはこれこれだろうから、ここまで考えておけばよかろう、とした点であり、「ものづくりへの自信」のなせる業かもしれないが、これが「苛酷事故は起こりえない」ことにつながり、全電源喪失・最終熱除去喪失に対する苛酷事故対策（アクシデントマネジメント）の不完全を招いたようだ。

技術を扱う者は今一度技術の限界を直視し、自然の力に対して常に謙虚であるべきで、その上で、科学技術を基盤として成り立っている現代社会を支える使命感・責任感そして倫理観を持つべきと考える。

今日はシニアの皆さんとの率直な対話を通じて、技術を志す学生としてこんなことを感じていただければありがたく思う。

5. グループ対話の概要

1) グループ 1; 原子力安全 A

①参加者

学生；カンパナート・シルワ（東京大学 M2）、小迫嵩幸（近畿大学 B2）、
鄭嘯宇（大阪大学 D2）

シニア；西郷正雄、宅間正夫、中村威

②討議の概要

安全 A 班に参加した 3 名の学生は、タイのカムパナート君と中国の鄭君に日本の小迫君と国際的な集まりとなった。シニアには、東電、関電の原子力発電所長経験者の参加、オブザーバではあるが生物系（がんの薬関係）の教授の参加で、私メーカ出身者を含め、話に広がりをもつことができ、実りある対話会を持つことができた。

学生からの質問は、予め準備された質問事項に沿って、カムパナート君班長のもとに進めた。

○BWR の SBO の試験について

- ・外部電源は、所定時間内に立ち上がる前提で、内部電源復帰のためのディーゼルの立ち上げの試験程度を実施。
- ・実際にシビアアクシデントをシミュレートすることは、現場では難しい。

○避難区域等の解除除染レベルについて

- ・20mSv 程度で問題がないのでは。
- ・まず国が被ばく量の影響を健康的影響の事実を基に、社会的影響を加味して理解すること、その上で、被ばく量の健康的・社会的影響を国民がある程度判断できるよう示して、国が方針をしっかりと決める。

○防災への取り組みについて

- ・シナリオ程度のチェック。「起こらないであろう」との考えの甘さあった。

○リスク情報について日本の国民性に合わせた物差しは

- ・グローバル社会が進む中では、世界のリスク認識に日本が合わせた方が良い。

○補助金を受けていない周りの住民への理解活動について

- ・補助金は交付金の誤りで、公益に対する支援のお礼の金。
- ・信頼関係の回復が最も大切、金ではない。

(発表時のコメント)

- ・地域住民と事業者間の信頼関係が無いかのように言われたが、信頼関係はうまくいっている。

○脱原発について

- ・原発の必要性をエネルギーセキュリティーなどより説明。
- ・エネルギーはロングレンジで考えなければならない。当面はエネルギーミックスの中で、原発を位置付ける。
- ・今脱原発に向かうと他国は変更が可能であるが、日本の場合には変更が困難。

2) グループ 2 ; 原子力安全 B

①参加者

学生；鳥山拓也（大阪大学 M1）、船越航平（近畿大学 B3）、井内駿輔（近畿大学 B2）
シニア；上田隆、松永一郎、路次安憲

②討議の内容

あらかじめ、と言っても前々日であるが、送られてきた質問事項 5 問及び当日追加の 1 問についてシニアからの説明および質疑応答を行った。質問事項および話し合った主要なポイントは、

- AM 機器の重要度分類；重要度の高いものが故障する（使用不能となる）ことと、より重要度の低いものが使えなくなることとは独立事象であり、AMの考え方は、「グレードの低いもの（例；消火ポンプ）でもその時点で使えるものは全て使おう」ということなので、重要度分類はまちまちであることなどを議論した。
- シビアアクシデント想定範囲；これまでは実質的に「内の事象」を対象として考えられてきた。また、基本的に「単一故障」を暗黙のうちに考えていた。それが津波により多くの機器が損傷するという事故に対するAMの不備の形となって現れた。
- 安全性の判断要件；発電所の運転継続、再開のためには、事故後の追加安全対策、ストレステスト、安全性総合評価で十分かの疑問が出され、津波以外の外部事象の考慮やそれらに伴う状況の想定具体化など十分に検討されているか確認する必要があるなどのことについて議論した。
- 緊急時のための訓練・対策；国、地方自治体及び電力は毎年訓練を実施してきたが、スケジュール重視で必ずしも実践的ではなかったなどの反省点について議論した。
- 安全委員会の許可基準；安全委員会は各種指針類を作成しているが実質的にそれを運用しているのは保安院。学生は安全委員会が全てについて最終判断をするとのイメージを持っていたようだが、最終判断に関する安全委員会のスコープは小さく実質的には保安院が決定していることなどを説明した。
- 継続的な SA 対策改善方策；テロも含めて常に危機意識をもって計画した上で、「何事も起こらなかつたら儲けもの」との冷徹な考え方が必要で、原子力だけではなく防衛問題等にもいえることで、国民の意識変革も必要などの議論を行った。

全体的には 3.11 位以降の特徴かと思われるが、すぐに答えられる問題ばかりでなく現在原子力界全体の懸案事項として検討中の問題が多く、シニアからそれぞれ個人的な意見を述べ皆で検討する形となったが、参加学生諸君にとってはこのほうが望ましい状況かとも考えられる。模範解答的なものを示されてただ単に勉強するというのではなく、お互いに知恵を出しながら正解の確定していない問題に取り組むことは貴重な経験であり、シニアとしても多少の知識経験の差はあっても学生に教えるというより一緒に考えていくといった姿勢が重要であろう。

3) グループ 3；エネルギー政策 A

①参加者：

学生；（全員阪大）山本浩嗣（原子力系 M1、班長）、服部勇紀（地域冷暖房を専門 M1、

書記) ,佐藤幸博 (半導体を専門 M2)

シニア : 前田肇、伊藤睦、金氏顯 (班責任者)

②対話のサブテーマと対話概要

○今後の原子力推進のアピールポイントは何か？

(学生の意見) 経済優位性と安全性、さらにエネルギーセキュリティという3つの意見があった。経済優位性については更に原子力発電所の建設や運転管理により産業の活性化に繋がるという意見。しかし一方、経済優位性は不現実になったのでアピールできないという意見も出た。安全性を挙げた学生の意見は、大事故を起こしたのだからその経験を存分に生かして、世界の原子力の安全性を強化するというプレゼンスを発揮できるという意見であり、必ずしも安全性に高い原子力を輸出できるということまでは考えてない。

(シニアの意見と議論) 原子力の最大のアピールポイントは我が国のエネルギーセキュリティ (安全保障) の為に必要不可欠ということだ、と3人の一致した意見。更に前田氏より、原子力にはエネルギーセキュリティ上次の4つのリスクがある、①事故等の技術的リスク、②政治的リスク、③規制強化のリスク、④社会的リスク、そしてこれらのリスクを解決するには安全性強化が共通の解決策と説明。更に金氏より、リスクをこれまでは各エネルギーを獲得し利用するまでの死亡者で比べたら水力や石油、石炭よりも原子力は3ケタも少ない、しかし今度の事故で原子力のリスクは死亡者ではなく放射能をどれだけ環境に放出するかということがハッキリした。学生と更に質疑応答し良く納得した様子。一方、エネルギーセキュリティの点では天然ガスが最近注目されているのではないかと、という意見も学生からでた。なお、再生可能エネルギーは原子力の代替にはなり得ないことは双方意見一致し、話題にならず。

○国民への原子力の信頼回復の為に何をすべきか？

(学生の意見) マスコミが原子力の不安を煽っているのが問題という共通の認識。対策として、サイエンスリテラシーを教育で涵養、小学校からエネルギーの事を教育すべし。選挙の争点にし、全国民がマスメディアや事業者や国が広報媒体を介して勉強する等国民参画の意思決定。リスク認識をもっと国民に広めることが重要、等など様々な意見が出た。

(シニアの意見と議論) 金氏より、三菱総研の3万人への意識調査の結果を紹介、女性層の大半が脱原発傾向で女性層への理解が重要、又購読新聞による差も歴然。また大学や地元での授業や講演など草の根活動を紹介。前田氏より、電力会社による地元全戸訪問説明やネット利用などの活動を紹介。また、原子力委員時代に原子力政策大綱を一般公開で行った経験から、国民参画型の意思決定は困難との見解を述べ、議論。さらにマスコミは何故不安や危険を煽るのか？についても意見交換し、商業主義だという意見は一致。また地方記者の過激記事、マスコミ報道や記事へ抗議し効を奏した事例などをシニアより解説し、“マスコミに正義を求めても駄目”という意見に納得の

様子。国民のメディアリテラシー涵養、またリスク認識の涵養が重要と話が発展し、双方興に乗り尽きなかったが時間切れで終了。

4) グループ 4; エネルギー政策 B

①参加者

学生 : 西岡佳朗; 阪大 M1、
山田佳祐; 阪大 M1、
富山貴雄; 近大 B2

シニア : 小川博巳、松永健一、
益田恭尚



グループ 4 対話の様子

②議論概要

自己紹介の後、往復書簡での意見交換に加え学生側で準備してあった下記議題に沿って議論が行われた

質問①：原子力の経済性について、何を考えるか、質問②エネルギーコスト算出の問題点
雇用、エネルギーセキュリティー、電気料金の他に軍事的な優位性が挙げられており、一寸驚いたが、色々勉強し疑問を感じているなど相当高度な感覚を持っている。

エネルギー基本計画作成委員の顔ぶれも見なければならぬ点、新聞による論調の違い等も観察する必要があること等を説明し、将来を見て考える必要があることを強調した。

質問③：小型炉へのシフト

4S などについても勉強していた。ニーズのある地域についてはメリットもあるが、主流は大型炉とならざるを得ない実情に付いて議論した。

質問④：海外事業展開に東電が抜けた穴をどう埋めるのか

良く勉強した、なかなか鋭い指摘であった。

質問⑤：輸出行動原則

先進諸メーカーが輸出行動原則について議論し発表していることについての疑問点の指摘であり、勉強の様子が分かった。安全な原子炉のために必要なことで、国際社会としてサポートすべきという立場で議論した。

質問⑥：原子力の技術を PR することで国民の理解が得られるのではないか

これも中々鋭い発想であり、末に貢献している点や、困難な点に付いて議論を深めた

質問⑦：国民の意識改革、質問⑦：反対派の強み

我々の常識と多小づれはあるものの自分なりに良く検討した考えが述べられ、それらに沿っていろいろな議論ができた

5) グループ 5; 燃料サイクル

①参加者 学生 4 名 : 関根将史 (東海大 M1)、藤岡美咲 (近畿大 B2)
成川隆文 (大阪大 M1)、宮田和志 (近畿大 B2)

シニア 3 名 : 岸本洋一郎、橋場 隆、若杉和彦

②対話の概要

○高レベル放射性廃棄物について：学生から国内では多くの課題や問題があって地層処分場が決まらない等の不安と質問があった。シニアから使用済み燃料は既に存在し、今後も増加するため、科学的に検討した結果他の選択肢があり得ないと判れば、地層処分実現のために多くの課題を前向きに解決していく活動こそ大切である、ただし3. 11事故でも明らかになったように、シビアアクシデントに関する考察は今後の課題として追加されるだろうと説明した。

学生から原子力を受け入れた当時（半世紀前）廃棄物処分の問題を検討したのか、勝手に使用済み燃料ありきと云われても無責任ではないかとの発言があった。シニアから、当時は国民こぞって「夢の原子力」として歓迎した経緯があるが、処分まで考えた記録はない、新しい技術を導入する場合同様な経緯があったことを歴史が示している、今回原子力を国として受け入れるかどうか国民的な議論の対象になっているが、これからはこのような過程が必要になるのではないかと話し合った。

○高速増殖炉の開発について：学生からもんじゅの予算が縮小されている等、今後の開発の必要性について懸念と質問があった。シニアから将来のエネルギー確保の意味の他、再処理や高速炉、ウラン濃縮等の燃料サイクルを国際的に認められているのは非核兵器国の中で日本だけであること、その技術を世界平和秩序維持のために活用することが大切であり、視野を世界に広げる必要がある、3. 11事故の後国内世論はそれどころではなくある程度冷却期間は必要だが、いずれ国民に理解されるだろうと説明した。

○今後の燃料サイクル開発について：学生からトリウム燃料サイクルの活用価値について質問があった。シニアからトリウムを扱う際強い放射線の影響があり、インド等で開発されているものの難航している、日本でも研究室レベルではある程度の経験があるが実用化には情報が極端に不足している、現行の軽水炉燃料サイクルの他にトリウムサイクルへも貴重な人材を割くことは実態として難しい等と説明した。

学生との相互の対話の中で、燃料サイクルを進める意義はあるが、まず国民の原子力に対する理解が進むことが何より大切であり、これなくして将来への展望はない、どのようにすれば理解を促進させることが出来るか真剣に検討すべきとの意見では両者一致した。

6. 学生の発表

①Gr1；グループ1；原子力安全A

世界標準のリスク情報活用、SBOの実試験の実現性、地域住民の信頼回復方策などについて発表が行われた。質疑応答では、地域住民との信頼にはこれまで多大の努力がはらわれており、むしろ問題は地方と中央との争いではないかとの意見が出された。

②Gr2；グループ2；原子力安全B

安全基準へのコスト意識の混入、地域も含めたシステム全体の安全確保の必要性、シビアアクシデント対策の規制導入の必要性などについて発表が行われた。質疑応答では、

アクシデントマネジメントの法制化の必要性が指摘された。

③Gr3；グループ 3；エネルギー政策 A

原子力のアピールポイントとしてエネルギーセキュリティーの観点が必要、海外知見も含め技術のみならず社会、政治、規制リスクまで幅広いリスク評価の必要性、積極的な情報発信による国民的理解形成に必要性などについて発表が行われた。質疑応答では、特に NHK など影響力の大きいメディアの誤報の修正の必要性が指摘された。

④Gr4；グループ 4；エネルギー政策 B

経済性評価のみならずお金に換算できない価値の評価の必要性、海外展開の当面の主体と事故防止のための共通の原則の必要性、原子力受容のための説明トレーニングや隣接以遠への補償の必要性について発表が行われた。

⑤Gr5；グループ 5；燃料サイクル

高レベル廃棄物の万年オーダーの確証のため国民一人一人が責任をもつこと、燃料サイクルはエネルギーセキュリティー上重要であり特に FBR は核不拡散面からも必要、福島後の新たなリスク評価の必要性や放射線も含めた国民理解の必要性などについて発表が行われた。質疑応答では、まず「トイレ」を作って安心してもらうことが先決、などの意見が出された。

7. 前田肇氏より講評及び閉会挨拶

学生からの活発な発言が出て充実した対話になされたことがうかがわれる。発表では若い人の考えもしっかりしていると感じられた。今後以前にも増して原子力の信頼性回復が重要であり、このための地道な努力が必要であるが、これらは学生がたをはじめとする若い人の双肩にかかっているのでは是非前向きに進んでもらいたい。

8. 西山佳朗君より学生決意表明

シニアの方々の意見は参考になった。国内のみならず世界に目を向けると原子力の必要性が判る。特に途上国の期待が大きい。原子力を通じた世界貢献ができる。震災後温暖化対策の政策が変化しているように見受けられ、世界のエネルギー問題を考える必要があると思われる。日本の原子力の課題も多いが使命も大きいと感じられる。学生として頑張っていきたい。

9. シニア感想

(1) 伊藤 睦

学生とシニアと 3 人ずつの同数で、時間も 3 時間半とたっぷりあり、往復書簡に参加していた学生は班長の山本君だけだったにも関わらず、大変議論が噛み合った。佐藤君と服部君が原子力専門ではなく、しかし大いに関心があり第 3 者的な見方考え方で意見をだし、それに学生班長であり原子力専攻の山本君が更に別の意見をだし、という多彩な意見が並

べられたので、大変活発な議論を行うことが出来た。またシニア側も電力 OB でかつ WANO 議長や原子力委員という極めて多彩な経験の前田氏からの話は非常に説得力があった。またあと 2 人のシニアは BWR メーカーと PWR メーカーの OB なので、3 人 3 様の経験でありながら、ほぼ一致した考えであることも学生には納得がいったのではないだろうか。

学生 3 人共に問題意識と理解力は大変素晴らしく、またエネルギー問題や原子力の問題は専門家にだけ任せてはいけないという想いを更に強くしたことと思う。なお、ひとりとは来春経産省に入省すること内定しており、このような機会を捉え進んで参加した気概には期待したい。

最後に、素晴らしい会場で、スムーズな運営のもと、新進気鋭の学生達と議論でき、満足でした。一つ残念だったのは、我が班に参加予定で鋭い質問を 2 つも予め出していたタイ留学生のティティラット・ティツプサムリットクンさんが風邪の為参加出来なかったこと、同じタイ留学生のカンパナート君によるとタイ美人だそうで、余計に残念だった。

(2) 上田 隆

アンケートなども見ての全体の感想ではあるが、今回はエネルギー問題や原子力の必要性といった基本認識はすでに持っている学生が多く、3.11 以降、これらの問題にまでさかのぼった疑問等があるかといった心配は杞憂であり、学生諸君から逆に勇気もらった感もある。今後一時的には原子力に対する逆風も強くなるかもしれないが、現在の考えをしっかりと持って、当面は事故の収束後始末をしっかりと行っていくとともに、是非ともその先の新たな原子力展開の準備をしてもらいたいと思う。

(3) 小川博巳

政策 B 班に参加した。往復書簡を踏まえての対話会としては、対話 in 関東に続くものであったが、学生諸君がよく勉強しており、サブテーマ毎に彼らなりの捉え方・意見をブツケてきたことに好印象を持った。学生のアンケート結果を未確認であるが、学生からの発言、シニアの丁寧な解説と発言など、対話の密度の濃さから判断して、学生の満足度はかなりのレベルであったと思われる。

(4) 金氏 顕

学生とシニアと 3 人ずつの同数で、時間も 3 時間半とたっぷりあり、往復書簡に参加していた学生は班長の山本君だけだったにも関わらず、大変議論が噛み合った。佐藤君と服部君が原子力専門ではなく、しかし大いに関心があり第 3 者的な見方考え方で意見をだし、それに学生班長であり原子力専攻の山本君が更に別の意見をだし、という多彩な意見が並べられたので、大変活発な議論を行うことが出来た。またシニア側も電力 OB でかつ WANO 議長や原子力委員という極めて多彩な経験の前田氏からの話は非常に説得力があった。またあと 2 人のシニアは BWR メーカーと PWR メーカーの OB なので、3 人 3 様の経験でありながら、ほぼ一致した考えであることも学生には納得がいったのではないだろうか。

学生 3 人共に問題意識と理解力は大変素晴らしく、またエネルギー問題や原子力の問題は専門家にだけ任せてはいけないという想いを更に強くしたことと思う。なお、ひとりとは

来春経産省に入省すること内定しており、このような機会を捉え進んで参加した気概には期待したい。

最後に、素晴らしい会場で、スムーズな運営のもと、新進気鋭の学生達と議論でき、満足でした。一つ残念だったのは、我が班に参加予定で鋭い質問を2つも予め出していたタイ留学生のティティラット・ティツプサムリットクンさんが風邪の為参加出来なかったこと、同じタイ留学生のカンパナート君によるとタイ美人だそうで、余計に残念だった。

(5) 岸本洋一郎

1か月前の関東での対話会に続き福島の事故から9か月後に開かれた今回の対話会だったが、この2回を通じてほとんどの班の議論に、放射線リスク/原子力リスクの理解という問題が横たわっていたように思う。ある班の報告には「歴史的に日本にはリスク概念がなくこれを導入する必要がある」との指摘があった。

10年ほど前、JCO臨界事故(1999年9月30日)の後、リスク・コミュニケーション活動を始めようと思ったとき、「リスク」に相当する日本語あるいは大和言葉を探し、「おぼろげな危うさ」、「危なさ」、「おそれ」等が挙がったが、ピッタリするものは見つからなかった。日本語にそのことばがなかったということは、そうした観念もなかったという証左のひとつだろう。リスク概念の日本社会への導入の必要はそのとおりだと思うがどうアプローチすべきか。

近代において確率統計学、工学等で数式化され、例えば、その大きさと発生確率という2つの量の積その他の形式で表されるようになったリスクであるが、そうした量的表現まで含めてリスク・リテラシーを求めるとするのは、相当に困難なことかも知れない。しかし、通常放射線リスクの大きさは寿命短縮か金額換算で表すが、今回の経験から損害額で表す福島事故による原子力事故リスクを、集団放射線リスクの金額への換算値と解釈すれば、この事例をベースに将来の原子力リスクを算定することも可能になる。国民と社会はこれをどう受け入れることになるのか。

原子力以外のリスクも含めて現代の様々なリスク情報を提供し、受け入れ可能なリスクの選択範囲を人々に求める、そうした、これまでは取り組まれてこなかった課題に政府は立ち向かわなければならぬということになるのではないか。これからの時代を背負う若い学生諸君と真剣に議論していくと、リスク概念の教育への期待を表明しつつも、一方で国全体でこの問題を解決する道筋を政治のリーダーシップの下に進めることが、最早不可欠な状況にあるのではないかと思う。当面のこの問題の具体例は、福島サイト外の汚染廃棄物の貯蔵、処分問題である。当面する各地の原子力発電所再稼働問題も、リスク情報の提供と選択を必要とすることになるのかも知れない。

対話の中では、リスク・コミュニケーションあるいは、科学技術コミュニケーションの一環として、アウトリーチを実践的に試みることの意義に触れたが、原子力の安全問題の

解決策を議論していくと、結局この社会心理問題、情報に基づく個々人の選択判断の問題という社会領域の課題に突き当たらざるを得ない。複雑・巨大な技術システムとの共存を抜きにして考えられなくなっている現代文化・文明の宿命なのかもしれない。

(6) 宅間正夫

今回の対話はあらかじめ往復書簡による質疑応答を基にしたためか、対話のテーマが整理され、またそれぞれのテーマを深掘りした討論が出来た。シニアも気がつかなかった問題や応答に窮する鋭い質問も出て、学生さんたちにとって今までのあいまいな部分がクリアになったことがあっただろうし、シニアの方も今一度自分を振り返るようなこともあって、きわめて有意義な対話であった。その理由の一つには対話の司会役の学生さんが優れていたことと共にオブザーバーの先生を含めてメンバーが学部生からマスター・ドクターと多様だったこともあったと思われる。各グループが少人数で個室に分かれていたことも集中した討議を行うのに効果的だった。皆様、ありがとうございました。

(7) 中村 威

今回の対話は事前の学生側からの質問、疑問に対してあらかじめシニア側から回答、意見が提示され、それに対しての更なる質問が提示されることにより、対話の活発化、効率化などが図られた。その結果、昼食をはさんだ 3 時間半の時間が非常に短く感じられるほど益のある対話がなされた。

我々のグループ安全 A 班には、2 名の留学生が参加されていたが、彼らの質問はなかなか的を得たものであった。今回の福島事故後の我が国の取り組みが将来彼らの国においても重要な問題になりうる、さらに原子力はグローバルなものとして捉える必要があるという意識を持ち議論を進めていたところにも、彼らのその国における先人足らんとする意気込みを持っているように感じられた。それは小生が原子力に従事し始めたころを思い出させるものであった。

さらに、懇親会においても、将来、この地球の人口増加などの問題を考えた時に、エネルギーの在り方はこれからのそこに生きる人々自身の問題であり、真剣に自分で考える必要があるのではないかなど、他グループの学生たちからも質問を受け、いろいろ経験したことなどを踏まえ意見交換でき、有意義な時間であった。これからの若い人たちに期待したいものである。

(8) 西郷正雄

やはり往復書簡の延長線上であるので、対話 in 関東の時と同様に、最初から深みのある対話ができ、学生だけでなくシニアも勉強になるところが多かったと思う。

特に、質問事項をあらかじめ準備していたことは、良かったと思う。

ただ、学生が 3 名であるので、深みのある話は出来たかもしれないが、5,6 人の学生との対話の方が、シニアは遠くから来ていることもあり、コストパフォーマンス的に良いのではなかったかと思う。

私たちの班は、タイと中国の留学生に、日本の学生の 3 名で、日本人が 1 人というのは、

なんとなく物足りなかった。中国からの留学生の鄭君は、日本語との接触が1年半ということだったが、会話にはついていけたように見受けられたので、少し安心した。

カムパナート君は、以前より関わりをもっているために、原子力についての知識が豊富であり、深みを持って対話できたことは良かった。

近大の小迫君は、B2ではあるがしっかりしていた。これから原子力についての専門を学ぶことになると思うので、より深く勉強してもらいたいと思う。

(9) 橋場 隆

原子力発電そのものへの関心が優先し、その後の再処理及び廃棄物処分の工程が後回しにされがちであるが、この分野には技術的にも社会的にも多くの課題が未消化のまま残っており、今後の原子力発電の行く末を左右する重要課題である。しかしながら、私自身も学校などで原子力について話す機会があれば極力触れるように努めてはいるが、実のところ技術的事項については表面的知識だけなので、学生との意見交換を通して、同時にシニアの大先輩の意見も拝聴でき大変有意義でした。

再処理及び廃棄物処分が行き詰ることは日本における原子力エネルギーの発電としての利用の破たん、如いてはエネルギー危機の招来につながる恐れがあるだけでなく、平和目的だけで原子力エネルギーを利用しようとするモデルの破たんをも意味する。対話を通して核燃料サイクルの持つ意義は共有できたと思うが、これから原子力産業に関わろうとする学生たちにとって、この分野が大きな不安材料であることは否めない。福島第一発電所事故による放射能汚染と避難民の発生、それに続く原子力発電所の運転再開の延期による電力不足は大変痛ましいことであり残念なことである。しかし、我が国の復興には早急に乗り越えることが求められている課題である。これを乗り越える過程で日本社会及び我々が多くのことを学び、さらに人々が核燃料サイクルにも真剣に目を向け、福島の復興の過程で学んだことを生かせるようにしていかなければならないと改めて思いました。

(10) 前田 肇

1. 私にとっては初めての往復書簡に基づく対話であったが、双方の考え方がよく分かったうえで、かつ事前の質問も受けていたため従来の方式に比べ非常に内容のある、密度の濃い対話であったと思う。

2. 対話の進行に当たっては常に学生の考え方を聞き出しながらシニアの意見を述べるようにしたので、活発な対話が出来た。班の学生が3人も院生であったこともあり、受け売りではない自分の考えというものが随所に出てきて、非常に心強く感じた。

3. 原子力のアピールポイントについては、学生たちは経済性を挙げたが、経済性の算定には恣意的な面があり一般的な説得力に欠けると考えていたのは面白い発見だった。それに対しシニアはエネルギーセキュリティを挙げたが、学生たちも納得した様子だった。

4. シニアが原子力の潜在的リスクとして技術的リスク、社会的リスク、政治的リスク、規制強化のリスクがあると説明したのに対し、学生は「技術的リスクは今後専門家の努力

で最小化できるとして、その他のリスクを減らすには社会・国民の原子力受容性を高めることが前提になるのではないかと反応し、議論は国民理解へと進んだ。

5. 国民理解を高めるためには、原子力のアピールポイントを対話集会や草の根活動、マスメディアやネットを通じて伝える活動を根気よく続ける必要がある。しかしもっと重要なのはリスクという考え方の理解である。日常生活や経済活動を始め、あらゆることに絶対安全というものではなく必ずリスクが存在し、我々は対象とするもののリスクと効用を比較較量しそれを受け入れるかどうかを決めるという考え方を如何にして日本社会に根付かせるかという議論で時間切れとなった。

6. グループの概要報告のような感想文になってしまいましたが、活発な議論の往復により対話が進行していった様子をお伝えしたかった次第です。

(11) 益田恭尚

往復書簡で議論しているだけあって、原子力が必要なこと、自然エネルギーに限界があることはとうに卒業した議論が展開された。特にM2の二人の勉強のレベルの高さには驚かされた。B2も未だB2でありながら良く勉強している。良い議論ができたと思うが、欲目ながら発表も一番纏まっているように感じた。将来原子力の維持発展のために頼もしい後継者になってもらえるのではないだろうか。

(12) 松永一郎

対話イン関西は2年ぶりの開催であり、「往復書簡」の内容を対話により深耕する方式は今回が初めてのものであった。東京では本方式による対話会を3年連続、3回実施しており慣れたものであったが、はたして関西ではどうかとの心配がないわけではなかった。しかし実施して見ると杞憂に過ぎないことが分かった。また当初、3テーマ3グループで実施の方向であったが、3テーマ5グループの少人数対話にしたのも結果として良かったと考えられる。学生の知識にばらつきがあったが(阪大・・・院生、近大・・・学部生)、少人数にすれば、「ただ話を聞くだけ」という立場をとれず、知識の有無にかかわらず否応なく対話に参加せざるを得ないのでそれだけでも本人のためになるであろうし、来年度実施すればそのつもりになって事前に準備して参加するだろう。

原子力安全班Bは阪大M1の鳥山君、近大のB3の船越君、B1の井内君であり、鳥山君は原子力専攻、船越君と井内君は近大のエネルギー研究会のメンバーであった。今回の事故は深層防護においてSA対策が法定化されず事業者の自主基準になっていたことが遠因だったこと、防災対策も不十分で実際にはオフサイトセンター事態が被災しSPEEDIも役立たずに終わったため、避難などが後手に回ったことなどが話し合われたが、その手の知識の殆どない井内君でも感覚的に何が話題となったか掴めたようなので、まずは成功と言えよう。

最後になりますが今回、学生幹事として立派に対話会をマネジメントした成川、山本の両君に敬意を表するとともに、今回の経験を踏まえて来年はさらに充実した対話会にするようお願いいたします。また、東京から参加したカムパナート君と関根君は、関東と関西の

学生間のコミュニケーションの増進に大いに貢献したと思います。

(13) 松永健一

グループ構成が少人数で学生とシニアが同数（各3名）であり、かつ「往復書簡」による事前対話がされていたという効果が、グループ対話で現れた。「往復書簡」という事前運動がなく、グループのシニアが1～2名という従来の対話では、情報交換の域を出ることが難しかったが、今回は、学生の様子を見ながらも「はじめに」を飛ばして「私見」の域までお話した。1950年代に少なくなかった「停電」の幼児実体験を礎として、国家観の一つとしてエネルギーを論ずる等、普段意識していない発言をしたりして、自分でも驚く場面があった。自分の他にシニアが2名という安心感があったためと思われる。学生諸氏は、あの手の「私見」も含めてシニアはここまで考えているのか、と深読みしてしまうかもしれないことが気になるが、私にとっては「新発見」であり、こういう機会が与えられたことに感謝したい。

ほとんど感想文には出ないが、懇親会は貴重である。私は自称「写真班」として、懇親会の模様を数多く撮影しながら、学生諸氏が誰とどんな話をされているかを観察した。一人のシニアとじっくり話す人、いろんなシニアを熱心に渡り歩く人、いろいろであったが、撮影された写真を見てハッと気づいたことがある。学生とシニアの諸氏は、「使命を達成した」と言おうか、なんとも言えないイイ顔をされている。特にシニアの顔には、「満足感」を超越して「DNAに刷り込まれた伝承を果たした」という安堵感が伺えた。学生諸氏は、あのイイ顔で40～50年後には、シニアを超える成果をなさねば国家が成り立たないことを感じてくれたであろう。期待したい。

(14) 路次安憲

私は“2011年度往復書簡”のメンバーではないが、関西在住ということもあって参加させていただき、「原子力安全班B」に所属した。

これまでの対話会と比較しての今回の特長と感想を以下に記す。

*グループが小人数でシニアと学生が同数（3対3）であったこと、往復書簡を通じて学生が自己の関心事・世の中の問題点等を把握してきていることから、濃密な対話が可能であった。今後の対話会についても、出来るだけ小人数でじっくりと話し合える場とできれば理想的だろう。

*安全班Bの学生の構成はM1、B3、B1とバラエティーに富み、特に1年生がいたのは私のこれまでの経験では初めてである。

1年生に知識・経験が乏しいのは当然だが、1年生時点からこのような会合に出席し、さまざまな内容を学び取ってやろうとの意気込みは称えられるべきでよかったと思う。私からは、「本日の対話では、個々の技術の詳細よりもまだまだやるべきことが多くあるということを理解することが大切。かつ、自分が何とかしようとの意欲を持ってもらうことを期待したい」とエールを送っておいた。

*学生の関心は確率論的安全（リスク）評価（PSA）、アクシデントマネジメント（AM）

そして規制のあり方（組織論含む）であった。

いずれも重要なテーマで、短時間の議論で意を尽くせるものではないが、以下に記すようなこの国の風土にも関わる根の深い、しかし改善して行かねばならない問題であることは共通認識化が図れたようである。

①原子力のみならず防衛などにも見られるように、冷徹に最悪状態をシミュレートした上で合理的な解決策を図ろうとの取り組みとはなかなかならないこと。

②縦割り行政機構の弊害、規制機関自体が“行政”との認識が強く、技術専門家を養成しようとの意欲が少ない。

（15）若杉和彦

11月12日の対話会イン関東2011に引き続き、学生との往復書簡をベースにした対話会が開催された。関東の時もそうであったが、期待に違わず話題を深掘した対話が展開され、若者に将来を十分託せるとの思いが確信に変わり、満足した。対話会が成功した理由は、カムパナート君、成川君達学生側の周到な準備と協力が大きいと考えられる。

燃料サイクル班では、3.11事故で発生した放射性廃棄物をどうするのか、今まで貯まってきた使用済み燃料をどうするのか、六ヶ所再処理施設や高速増殖炉もんじゅの見通しはどうか、それでも燃料サイクルは本当に必要なのか等を話し、学生はそれなりに現状と必要性を理解してくれたと思う。ただ最後まで明解な回答は出せなかったものの、次の2点はシニアにとっても今後重要な課題になるとの思いを深くした。

（1）燃料サイクルの今後の進展は、国民の原子力に対する理解が得られるかどうかにかかっている。放射線を過度に怖がっている国民の理解獲得をどのように促進させるか。

（2）燃料サイクル技術の維持保有は国のセキュリティー上大変重要であり、単にエネルギー獲得に留まらず、国防上の意味も含めて広く正確に理解してもらうにはどうするか。

（16）浅井竜哉（オブザーバー）

たまたま松永一郎氏と知り合う機会があり、勧められるままに11月26日（土）に福井大学で開催された「学生とシニアの対話 in 福井大 2011」にオブザーバーとして参加した。これまでも何度か福井で「学生とシニアの対話」は行われてきたが、実際に参加するのは初めてであった。

「学生とシニアの対話 in 福井大 2011」は午後1時から始まり、開会の挨拶や参加シニアの紹介の後、おそらく話題提供のためだと思われるが、小川博巳氏による30分の基調講演があった。その後、1名ないしは2名のシニアに4から5名の学生という構成の6つのグループに分かれて、グループごとに決められたトピックについて対話を行い、グループ発表・質疑応答という流れであった。

対話がどのように行われているのか興味があったので、途中から一つのグループに加わって話を聞くことにした。限られた時間だったので正確ではないかもしれないが、トピックについて学生の知識があまりなかったためか、シニアの方が話題を提供することが多かったような気がした。また、シニアの方に対して学生の方が数が倍以上あったためか、シニア

の方からの説明に納得していないような学生もみられた。

一方、「学生とシニアの対話 in 関西 2011」は、お昼前から始まり、基調講演なしにグループに分かれ、学生とシニアの自己紹介の後、すぐに事前に決めた議題に沿って対話を始めたのには驚かされた。

今回が初めての試みなのか知らないが、学生とシニアとの間で往復書簡という形で事前に議論を行い、質問を整理して当日の議題としてまとめてあった。私は原子力安全班 A に参加したが、班長のカムナパート君がうまく議論を進め、シニアの方は学生からの質問に答える形で、あくまでも学生が対話の主導権を握っていたのが印象的だった。

今回の「学生とシニアの対話 in 関西 2011」では、参加した学生とシニアの人数がほとんど同じで、そのため一人のシニアの方の意見だけではなく、別のシニアの方の意見を聞くことができた。また、学生側も十分に各自の質問をする機会と時間があったように思われた。

最後に、各グループによる発表があったが、どのグループも発表スライドが良くまとまっていたと思った。また、発表に対する質問もシニアの方だけでなく、学生からもあり、学生の積極性が感じられた。

今回の「学生とシニアの対話 in 関西 2011」では、非常に中身のある対話が行われていたと思うが、これは事前の往復書簡での議論によるところが大きいのではないと思う。対話ごとに今回のような往復書簡をするのは難しいと思うが、事前にある程度の質問を学生に用意させるようにしたら、福井での対話ももっといいものになったのではないと思う。

10. 学生の事後アンケート

参加学生 16 名中 15 名 ((1) ~ (5)、(6) 以降は 14 名) から回答を得た。

(1) 事前に往復書簡は読みましたか。

・ ほぼ読んだ (7)、一部読んだ (8)、あまり読まなかった (1)、読まなかった (1)。



- ・ 飛び入り参加であったため全部読むことはできなかったが今回のお話を参考に改めて読ませさせていただきます。
- ・ 時間が無かったので。あと 1 ~ 2 日前にいただければ読めたのですが。
- ・ 学生が色々な質問をしていて読んでいて楽しかった。
- ・ 火曜日に参加が決まったため、関連する箇所だけを読みました。
- ・ 興味があったから
- ・ 質問、返答ともに質の良いわかりやすい内容でした
- ・ 興味をそそられたから
- ・ 僕の知りたい情報が多く含まれていたため
- ・ メールに「まとめましたのでこれを読んでください」とあったので。

(2) 対話の内容は満足いくものでしたか。

・ とても満足 (12)、ある程度満足 (3)、やや不満 (0)、大いに不満 (0)



- ・ シニアの方々の意見を一方的に聞くだけでなく、こちらからの意見も聴いていただき、それに対するフィードバックをいただけたため
- ・ しっかりと答えていただけたから
- ・ 今回のテーマでは満足したが、他のテーマも参加したかったので。
- ・ 色々と議論できたため
- ・ 別の視点をもつことができたから
- ・ 少し開きがあった
- ・ 知りたいことに加え、さまざまな知識を得られた。
- ・ 頭が固かったと実感しました。「怖い、不安」は違憲ではない。どうするかまで考える。

(3) 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか

・ 十分聞くことができた (14)、あまり聞けなかった (1)、全く聞けなかった (0)



(4) 今回の対話で得られたことは何ですか (後ろの数字は重複数)。

- ・ 原子力に限らず、エネルギーというものを考える上での指針を得られました。
- ・ もんじゅ及び地層処分の現状
- ・ 視点の多様さ
- ・ 原子力に課題がよりわかったことと、原子力の歴史についてなど。
- ・ 原子力に対して新たな視点をもつことができました
- ・ 自分の意見を論理的に言うこと
- ・ エネルギーに対する考え、
- ・ 防災知識
- ・ 原子力に関するすべてのことにおいて、国民の理解が重要であるということ
- ・ 理想、夢と事実、現実の違いに改めて気付きました。不安があったとしても、どうにかしないといけない事実、立ち止まるといけないということを深く認識しました。
- ・ 不安があってもどうにかしないといけない事実、立ち止まるといけないということ。
- ・ 原子力の実情、物事のとらえ方、考え方
- ・ 世代が違えばお互いの間に溝が生まれる。そのさまざまな意味の溝を埋めるのが対話だと思っているから。
- ・ 新たな考え方、視点

(5) 「学生とシニアの対話」の必要性についてどのように感じますか

- ・ 非常にある (14)、ややある (1)、あまりない (0)、全くない (0)



- ・ 経験ある方々から若い人々への知識・経験の継承や若い人たちの意識向上のためにもぜひ必要だと考える。
- ・ 大学では原子力の‘工学’しか学べないため。
- ・ 学生の意見を強め、疑問を解決できるから。
- ・ 経験も量もさることながら、世代による議論の違いが重要
- ・ さまざまな知見や経験をお聞きできる
- ・ 現場の話を聞けるから
- ・ 現場や社会に出ないと得られない知識が非常に多く、とても参考になりました
- ・ 経験を学生に伝える必要がある
- ・ 原子力の世界で長年活躍してこられた方の話はなかなか聞けるものではなく、重要であると思う
- ・ シニアの方はやはり考えが広いです。

*以下、一名が裏面記入忘れのため総数は14.

- (6) 今後、機械があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか。

- ・ 参加したい (5)、もっと知識を増やしてから参加したい (6)、十分話できたからもういい (2)、二度も必要ないからもういい (0)、その他 (1 ; リベンジしたい)



- ・ 今回は知識が乏しくあまり質問できなかったので、リベンジしたいです。

- (7) エネルギー危機に対する認識に変化はありましたか

- ・ 大いに变化した (1)、多少变化した (2)、あまり変化しなかった (9)、全く変化しなかった (2)



- ・ もともとエネルギーに関して危機感をもっており、それがより具体化したため
- ・ 以前から原子力は必要だと思っていたから。
- ・ 大学で同じような考えの先生がおられるので
- ・ エネルギー関係の話をあまりしなかったから
- ・ 一貫して危機を感じています
- ・ もともと危機意識はあったが、原子力の重要性について再認識した。
- ・ 二本のエネルギー危機は大きいままです。

- (8) 原子力に対するイメージに変化はありましたか

- ・ 大いに变化した (2)、多少变化した (4)、あまり変化しなかった (7)、全く変化しなかった (1)



- ・ 原子力の専門の方々からお話を伺うことで、その思想を知ることができたため。

- ・ 多くの視点を取り入れていること。
- ・ 大学で同じような考えの先生がおられるので
- ・ マスメディアの報道と異なる点について聞いたので
- ・ イメージがすでにあったから
- ・ 原子力はやはり必要な技術であったから
- ・ 対話に参加する前に原子力安全についてある程度正しい認識をもってると自負している
- ・ 高速増殖炉の重要性を知った。
- ・ 将来はなくなるべきと考えていましたが、また考え直します。(自分の意見として整理しきれいていません)

(9) 今回の対話で自分の学科との関連性を見出すことができましたか

- ・ 見出せた (10)、見いだせなかった (0)、どちらとも言えない (4)



- ・ 私の専門は半導体ですが、サイエンスという意味で考えた時、関連する部分もあるように感じました。
- ・ 来年から専攻なので
- ・ 原子力を学んでいるので
- ・ 学科で原子力関係のことを勉強しているから
- ・ 専攻がまだ未定のため
- ・ 原子力安全について学んでいるから
- ・ 原子の先生が多い

(10) 対話の内容から将来のイメージができましたか

- ・ できた (5)、ある程度できた (5)、あまりできなかった (4)、どちらとも言えない (0)



- ・ 将来のエネルギー行政、エネルギーのポートフォリオをどう考えていくべきかというところについてこそを学ぶことができたから。
- ・ もっと勉強してしっかりしたビジョンをもちたいです。
- ・ 課題がいっぱいなので、まだまだこれからという印象
- ・ これからやらないといけないことが判ったから
- ・ これからの勉強したいことの方角性を得ることができた
- ・ 元からできていた
- ・ 原子力のことは知るべきで、常に意識すべき問題であるが、g2 視力関係の仕事に就く予定はないので。
- ・ 自分の意見としてまだ整理できていません。

(11) 対話の中でシニアが思う若手の役割を理解できましたか

- ・ できた (7)、ある程度できた (4)、あまりできなかった (3)、全くできなかった (0)



- ・ 若手だからこそしなければならないこと、また次世代のために処理しておかなければならない課題もは秋できたから。
 - ・ 若手が決めていくことがたくさんあるから。
 - ・ シニアが当たり前と思うことを学生が知らないという、シニア側の認識の観点や将来の期待があると思う
 - ・ 現在の問題を課行けてできるのは若手だと思うから
 - ・ 期待されていることが話しぶりから十分伝わったから
 - ・ HLM、LLM についてより積極的に取り組むべき
 - ・ 今の流れに（マスメディアなど）流されてはいけない
- (12) 自分が思っていた若手の役割とシニアの考えは違いましたか。（後ろの数字は重複数）
- ・ 次の世代を創っていくということでは共通していました。また、原子力の存在意義について改めて考えさせていただきました。
 - ・ 大きく違いはなかったと思います。もっと多様な視点をもちたいです。
 - ・ 多面的な見方を教わった。
 - ・ 高速増殖炉だけでなく放射性廃棄物も大事であると知った
 - ・ 防災に対する考え方の変化
 - ・ 「何が大変で難しい」で問題を終わらせずにその先を考えるということ
 - ・ 違ってない。より使命感を強く感じた
 - ・ シニアの方は自分の考えをしっかり持っていた。
 - ・ シニアの方は世界の中での日本の立場というものを理解している。
 - ・ 次の時代を創っていくという点では共通。原子力の存在意義について改めて考えさせられた。
 - ・ 「何が大変で難しい」で問題を終わらせずにその先を考えるということ
 - ・ 大部分においては違ってないがシニアの方からより詳細な答えを聞くことができた。
 - ・ シニアの方に私の意見を踏まえうえでいろいろな方向から答えてください。
- (13) 本企画を通して全体の感想・意見など
- ・ 本企画を通じ、原子力を含めたエネルギー問題について原子力の第一線で活躍されてきた一日中じっくりと議論をすることができ、本当に有意義な時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。
 - ・ 知識をたくさんつけたいと思いました。自分の意見をしっかりと一本にまとめたい
 - ・ 非常にためになった、また参加したい。2
 - ・ 対話会、往復書簡をこれからも続けてください
 - ・ よく勉強することができた。普通では聞けない原子力の歴史を聞けるのはとても良

い。近代史の教科書を出してもらいたい。

- ・ 去年の往復書簡もほしかった。また来たいです。
- ・ 原子力を含めたエネルギー問題について原子力の第一線で活躍されてきた方々と一日中じっくりと議論することができ本当に有意義な時間を過ごすことができた。
- ・ 大変良かった。是非次も参加したい。
- ・ 非常にためになりました、また参加したいです。

11. まとめ

特にアンケートなどをみると、往復書簡が下敷きとなり実り多い対話ができただけでなく、かがえる。また、学生さん自身エネルギーや原子力問題を前向きにとらえていることが判り、逆に勇気もらった感もある。なお、3.11以降原子力についての種々の未解決問題が顕在化しており、対話についてもこれまでのようなすでに確立された公式論を説明するのが難しい状況にあり、学生さんと一緒に考えて合意を形成していくといった姿勢が重要かと思われる。

添付資料

1. 写真

多くの写真をいただきましたがここでは一部を掲載します。



